平成24年2月号　№ 424

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町198-3
電話 (043)485-1801

箱根駅伝 … その思い ---------- 西山　章
ふきのとう ---------- 清澤瞳子
児戯「花一匁」考 ---------- 横山勇典
六十年ぶりに ---------- 林　久子

被災地の出合い

篠塚勝夫

3・11東日本大震災から1年近く。この間、2回都合ほぼ1か月間を岩手県下の釜石市と大槌町で被災地ボランティアとして過ごし、多くの貴重な出合いをいただいた。

仮設住宅の集会室を使って「お茶っこサロン」を設営した際、60代後半と思われる被災者と出合った。「わが家で最も背筋が伸びてシャンとしているのは90歳の母親だ」と語る。「大正10年生まれの母は昭和8年の三陸地震津波来襲、20年の艦砲射撃、35年のチリ津波来襲を受け、その都度家財すべてを失った。それに今回の被災だが、何かと不自由な仮設住宅での暮らしもいっこうに苦にする様子がない」という。幾度の災害・苦難を乗り越えてきた当地の人々の生き様・心意気を垣間見たように思われた。

被災地ボランティアに多くの若者が押し寄せ、彼らと相部屋で寝袋を並べるがそのひとり、20代後半の青年。2週間の休暇を申し出たが、長すぎると勤務先に拒絶された。被災地への思い断ちがたく、退社して参加したという。就職難の時世、帰省次第職探しに奔走することになると語るが、「働く喜びが実感できる日々」と目を輝かせる。

一方、高齢者ボランティアも活躍する。心のケアの経験豊かな69歳と、遠方から馳せ参じた元高校教師の2人と出合った。元教師は何と79歳と聞き驚愕したが、ボランティアの仕事がサロン設営等の軽労働にシフトしている現況にあって、むしろ高齢者に適した出番が多いようにも思う。

宿舎近くに被災後早期に再開した銭湯があり、ある親子とよく出合った。息子がかいがいしく父親を介添えし、2人でゆったりと湯船につかった様は神々しいほどの表情。聞けば97歳と56歳の父子。こうした濃密な親子関係を身近に目にすることが少なくなっただけに、私の「幸せの画像」に加える貴重な1枚となった。

被災地は時間とともに落着きを取り戻しつつあるが、心の傷の癒えない人も少なくない。廃墟と化した浦々や街並が復興に至るにはなお膨大な日時と費用等が必要である。「第二の敗戦」とも称されるが、政治の混迷ぶりは目を覆うばかりである。それだけに国民一人一人がこの難局を担う覚悟が求められよう。

読者諸氏をはじめ多くの国民が被災者と絆を交わした今回の大震災。これからも、可能な方は被災地に極力足を踏み入れ、復興を担いつつ国家・国民のあり様を考える縁(よすが)としてみてはどうだろうか。

（編集委員）

箱根駅伝…その思い

冬の楽しみのひとつが正月2日、3日の箱根駅伝である。すでに50年以上のお付き合いで我が家の年中行事になっている。思いおこせば駅伝とのつながりは7、8歳の時に聞いたヘルシンキオリンピック実況放送でありました。

ラジオから流れてくる「日本の皆様、日本の皆様…こちらはヘルシンキ」で始まるNHKの和田信賢アナウンサーの実況に胸を熱くしながら聞いていた事にあります（この名アナウンサーはオリンピックの実況を終えて帰国する途中、パリにて急死40歳）。

スポーツ好きであった我が家では、小さい頃から正月は当たり前のように箱根駅伝の放送がかかっていたし、子供心にその実況に胸をときめかした。今はテレビ放送があるが、当時はNHKのラジオだけであった。

朝8時のスタート、10時、11時台の15分間のダイジェスト版、なんと言っても5区の山登りの生放送では手に汗をにぎり聞き入っていた。何故こんなに緊張するのか、人に聞かれるが自分でもよく判らない。多分母校のタスキに青春のすべてをかけて走る選手に何ともいえぬ親近感を覚えるのだろう。私と同じ思いを持っている方も多いことでしょう。

今この歳になっても駅伝に限らず野球場、サッカー場等のメイン競技場に入る時にその高揚感からか、いまでも鳥肌がたつ。若き血をかきたてるその一瞬がたまらない。

（王子台　西山　章）

児戯「花一匁（もんめ）」考

故郷の子供の遊びを千余り集めた中に「花一匁」もあり、「誰かさんが欲しい」という一連の遊びの中のひとつでした。

♫荷物まとめて東京へ送ろう
♩荷物まとめて大阪へ送ろう
♫〇〇ちゃんが欲しい
♩△△ちゃんが欲しい
♩♫東京　大阪　花一匁
（勝った方が相手を受取る）
♩勝って嬉しい花一匁
♫敗けて悔しい花一匁

これをある人は花は女の子で人買いを唄ったもので、その代償が金一匁だったのではないかというのです。

昭和初年、昭和大恐慌や東北大飢饉が襲い農村は疲弊し、多くの娘が都会へ身売りされていったといわれています。そして都会で娼婦にさせられた娘が、客から指名を受け花代を受取って喜ぶ姿が遊びの中から感じとれます。

金一匁は3・　gで1gの今の相場は4千円位で、一匁では1万5千円位になります。これが一座敷（1時間半から2時間か）の花代だったのではないかと思われます。

こうしたことが遊びから読みとられ「誰かさんが欲しい」にこのような歌詞が組み込まれ遊びの形が出来たのでした。そして昭和のある頃に都会から地方へと広まっていったのではないでしょうか。

何も知らずに大人社会の暗い悲しい一面を、子供達は何の疑いもなく楽しく遊んでいたのでした。こうして意味を知ると何と嘆かわしいことだったのかと思われます。

東日本大震災や原発災害で、今何が起きてもおかしくない状況になってきています。80年前の悲劇を繰り返させないためにも、国は被災者に最大の支援を行い、一刻も早い復興に力を注ぐべきです。

（井野　横山勇典）

ふきのとう

4月末、札幌での同窓会に出席した帰途、室蘭高女時代の友人を尋ね、友の車で「洞爺一泊の旅」を楽しんだ。

4年前の洞爺湖サミットで整備された、有珠山や昭和新山の麓を経ての洞爺への道は、まるで私達専用道の様に、渋滞もなく快適だ。この地域は現在「洞爺湖有珠山ジオパーク」として、ユネスコが推進する世界ジオパークのひとつに登録されている。

「あっ、ふきのとう」と叫ぶ私の声で、急停車。山の斜面いっぱいに、あさぎり色の「ふきのとう」が、無数に顔を出している。残雪の間から、まぶしげに少し顔を出しているもの「只今参上」と堂々としているもの、あっちにも、こっちにも数えても、数え切れない、発芽のパフォーマンスは、その数だけ、多種多様。

突然の出会い、その芽生えには、生命の力強さを感じ、独特の春の香が伝わる。やがてこの辺一帯は「大ふきの原」。ふきの葉の下にはコロボックルも住んでいるのだろう、と想像させる程の、ふきのとうの大集団の発芽。

もし都会での芽生えだったら、首をちょん切られ、天ぷらに、みそ汁の実にと利用。ここは安全地帯。歓喜の発芽に春の陽が輝いている。ふきのとうの、地中からの発芽の様子は、稚気満々。昔から人々に愛され、早春の風物詩となっている。

偶然のこの出会いは、私の旅を更に豊かなものにした。無数のふきのとうの芽生えの姿は、今も深く脳裏にある。帰宅後、知人に話すと案の定、天ぷら、ふき味噌、味噌汁等に最適と、なつかしい料理の話はつきない。

（井野　清澤瞳子）

六十年ぶりに

電車に揺られながら、早く東銀座に着けばいいと思っていた。六十年ぶりに会う人が待っている筈だからだ。私が代用教員として、三年ばかり勤めた時に、たった一年間受持った新一年生の中の二人が、私に会ってくれると言うのだ。

一年生は六歳か七歳だった子どもが六十年もたっているのに、まだ覚えてくれているのが何と嬉しい事でしょうか。二人といっても一人は昨年会っていて、もう一人が六十年ぶりなのだ。三越のライオンの前で二人が待っていた。小さい時の面影が残っていて、七十歳に近い生徒との対面に年月の隔たりは感じなかった。

三人で小学校時代の思い出話など、飽きる事なく同僚の先生方の名前も出てなつかしく昔を思った。教員として正式な資格もなく子供を教えた事、今でも面映ゆく思っているのに「先生」なんて呼ばれて恐縮してしまった。教職を辞めてすぐ結婚した私も、子育て、嫁として姑に仕え、八十三歳の今日まで沢山の経験をしてきた。同じように、この子供達も、終戦後の恵まれない社会の中で、たくましくよく頑張って、今日まで立派に成人してくれて、ありがとうと言いたかった。

帰りがけに「先生また来年好きな銀座で会いましょう」と影が遠くなるまで手を振っていた子供達に涙があふれた。人で賑わう街の中で、感激と幸せを味わった一日でした。

（稲荷台　林　久子）

２月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

さくら道

大地震・大津波と原発に揺れた年も明けたが、目に焼き付いた被災地の映像は記憶から消えることはない。TV の報道を見る限り、仮設住宅はできたが町の復旧・復興には程遠く、いまも悲惨な状況は続いている。荒涼とした町跡にたたずむ人。ふるさとに戻ることも立ち入ることもできず、先の見通しもないまま避難地で年を越した人々。その心情はいかばかりか。それでも、涙をこらえて健気に「ふるさとのために生きて行く」と言う中高生や、子、孫のため必死で元の生活を取り戻そうとしている人々の姿を見るにつけ妻も私も涙する。せめて復興の槌音が響けば希望も湧いてくるのだろうが、あまりにも対応が遅い。政争に明け暮れ、政策の協議もない政治は空しい。

復興のための痛みは我慢します。被災地に、早く元気を届けてほしい。

（猪瀬信彦）

あとがき

箱根駅伝。今や正月の国民的イベントですね。年末の都大路を走る全国高校駅伝、元旦に上州路を走るニューイヤー駅伝、たすきは綿々とつながってます。その後世界の舞台へと羽ばたく選手も楽しみ。

花一匁。何とも悲惨な実情を児戯化したものなのですね。横山さんの研究に感服です。

ふきのとう。雪の下から次々と芽を出す光景が思い浮かびます。

暮れに「投稿者の年齢を」との読者からの要望がありました。プライバシーの保護、年齢を想像しながら読む楽しさを残す事にしました。

そんな中、83 歳の林さんは今春カレッジを卒業されます。御卒業後も活達な随筆の投稿をお願いしたいと思う者です。

最後に篠塚編集委員のパワーには敬服最敬礼！被災地の人々の心強い絆を感じました。

（稲田圭佑）